MONTO

岩手県立大学総合政策学部ニュース●第22号　2009.10.24
《総合政策学部 HP》http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/

特集●自然環境を知る

八幡平実習　水質調査

環境調査実習　水質調査

環境調査実習　地形図の判読

八幡平実習　野鳥ラインセンセンサス

八幡平実習　昆虫採集＆同定

環境調査実習　空中写真の判読

環境調査実習　シダ植物の分類

環境調査実習　カタクリ個体群調査

八幡平実習　中和処理施設

八幡平実習　国立公園の管理

CONTENTS

特集●自然環境を知る
おじゃします
小井田伸雄ゼミ／倉原宗孝ゼミ
New Intelligence
西出順郎准教授／金子友裕講師
コースを語る
学部ニュース
寄稿「総合政策学部への期待」
中村慶久 新学長
自転車フォーラム
野球部昇格
研究最前線
岡田　寛史
風のモント達
数理の世界
「クレジットカードのリボルビング払い②」
オープンキャンパス
キャンパス周辺散策
「啄木作品に見る大学界隈」

特集●自然環境を知る

総合政策学部に自然環境を専門とする講座があるのをご存じですか？その名も「環境政策講座」。環境政策講座では自然環境を調査し、環境問題の解決を考えるための学習や研究ができます。その様子を紹介しましょう。

環境政策講座HP　http:www-poly.iwate-pu.ac.jp/env/

八幡平実習

八幡平実習とは三年生の夏休みに行われる合宿形式の環境調査実習のことです。それまでの実習や授業で学んできた知識をフルに活かして挑みます。ここではそれぞれの調査項目について、どんな実習を行っているのか、のぞいてみましょう。

野生動物調査

八幡平実習では野鳥・昆虫・ノネズミについて調査を行います。目的はその場所の動物相を明らかにすることです。

野鳥ではラインセンサス法を行います。これはゆっくり歩きながら、片側五〇メートルに出現する野鳥を記録するもので、鳥のさえずりを聞き分けなければなりません。事前に学習するものの、非常に難しい調査です。

昆虫は夜間にライトトラップ法（明かりに集まってくる昆虫を採集する）などで採集し、集めた昆虫を同定します。特に同定作業は、非常に多くの類似した昆虫の中から、採集したものの名前を見つける必要があるため根気を要します。

八幡平実習－水質調査　機器の説明を聞く

八幡平実習日程				
	1日目	2日目	3日目	4日目
早朝		ネズミ トラップ回収		
午前	野鳥調査	水質調査	植生調査	中和処理 施設見学
午後	八幡平 山頂周辺 トレッキング	施設見学	植生調査	実習 振り返り
夜間	昆虫採集& 同定	水質まとめ 発表	植生調査 まとめ	

水質調査

八幡平市を流れる赤川と松川について調査を行います。赤川の上流には旧松尾鉱山があり、以前はここから排出される強酸性の坑排水で北上川が汚染されていました。現在では中和処理施設により中和されていますが、やや酸性の水が流れています。それぞれの河川の流下に伴う水質の変化を捉え、その変化の理由について考察する実習です。

現地ではpHや鉄、濁度、硝酸態窒素、透視度などの水質項目について測定します。これらの測定は直前の実習で行ったので、手慣れたものです。最終的に周囲の土地利用や市や県の統計資料なども用いながら、レポートとしてまとめます。

植生調査

ブナの自然林や里山のコナラ林などの森林の調査を行います。ここでは決められた枠内（森林の場合は一〇～二〇メートル四方）に出現する植物種をすべてリストアップする方法で調査します。そのため植物の知識が非常に要求されます。実習では、樹木についてはすべて探し、草本についてはできる範囲としています。それでも四〇種類以上の樹木が出現します。実習地によく出現する植物の図鑑が用意されているので、まずはその中から調べます。

調査された資料は、その土地の植生・植物のデータベースだけでなく、自然回復のときの資料ともなり得るものです。

他にも十和田・八幡平国立公園の管理について環境省レンジャーの方に案内いただきながら、問題点などについても学びます。

八幡平実習－植生調査　樹高を調べる

前期・後期の実習

前期の実習では、八幡平実習に備えて、地図や空中写真の判読、植物の分類、野鳥調査、水質調査など関連する事柄について学習します。

後期は応用編として地域の自然環境データベース作成やヒートアイランド現象を捉える実習、アニマルトラッキング（動物の痕跡調査）などを行います。

これらすべての実習を通して、自然環境を知るための調査方法について学んでいきます。調査の方法やその考え方などは、卒業論文や社会に出てからも利用できる有用なものになるでしょう。

（環境政策講座）

おじゃまします　小井田伸雄 ゼミ

英文読解もブログも経済学を理解する手段

ゲーム理論や意思決定理論という数学的な手法を用い、経済行動を分析している小井田准教授。今年のゼミ生は四年生の高橋華連さん、村上洋平さん、和久井彩可さん、斉藤加央梨さんと、三年生の佐藤麻衣さんの五人。三、四年生がともに学ぶため「まず議論の中心になる知識、『土台』を作ることが非常に重要」と、共通テキストの読み合わせが第一歩。英文の学部向け教科書を各自で訳し、レジュメにまとめて発表し合っている。

英語の読解力も求められる難しい演習と思いきや「訳すことで理解も深まった」と、五人は非常に意欲的。アメリカ政府と自動車企業の交渉についての考察、アンケートを用いた行動経済学、流通業界で進む中間企業消失の効果等々、卒業論文のテーマも定まりつつある。「教科書の知識にとどまらず、さらに興味を広げられるようになってきた」と、小井田准教授も手応えを感じている。

実は小井田ゼミでは、盛岡市内の有名パン店に関するブログを共同で運営。試食の感想を写真とともにアップしているが「地元の活性化はじめサイトの運営法、筋道を立て批評をする思考法の練習にもなる」と小井田准教授。このユニークなアプローチも、経済学をより深く知る手法のひとつなのだ。

自然環境を研究する

絶滅危惧植物を守る

平塚 明

岩手県でも多くの野生植物が絶滅に瀕しています。これらを守るには、まず、残っている少数個体から数を増やすことが必要です。平塚研究室では植物組織の断片を培養して個体全体の再生を試みています。あまりにも美しいために売買の対象となり、盗掘の被害を受けている山野草を、この技術で増やして園芸市場に出せば、盗掘圧を下げる効果もあります。ただし、この方法で増やしたものは遺伝的に同じものばかりになります。種を維持する最終手段としては有効ですが、すぐに野外に戻すというわけにはいきません。そのためには自然の植物集団が本来もっている遺伝的多様性を明らかにしなければなりません。

そこで、数少ない野生個体からDNAを採取して遺伝学的に解析するという研究を進めています。野外の自然の変化にさらされて生きている植物たちにはどんな顔ぶれ（つまり遺伝的な組成）の違いがあり、それらがどんな割合で、どこに生きているか（いたか）を把握して、初めて、人工培養によって増やした個体を野外に戻せます。

野生のアツモリソウ

アツモリソウはランの仲間で、魅力的な花をもつことから、野生個体のほとんどは愛好家たちに、あるいは売買目的の人たちに盗掘されてしまいました。かつては岩手県の山野に普通に生えていたのです。私たちは、アツモリソウが咲き誇る故郷の景観を復活させ、地域活性化に結びつけようとしている自治体のお手伝いをしています。さらに、アツモリソウと同じく地域の遺伝資源として重要な絶滅危惧植物ムラサキ（南部紫根染の染料）の保全についても研究を始めているところです。

（本学部教授　植物生態学）

岩手県内の気温分布を調べる

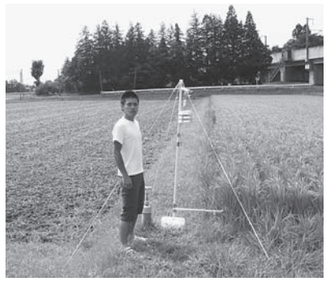
佐野 嘉彦

現在、私たちは、様々な気象データを扱うことができ、天気予報の精度も上がっています。気象庁のアメダスは、全国に約二一キロメートル間隔で観測点があります。しかし、農業に関する天気予測や天候デリバティブ、ヒートアイランドの実態調査などに必要な気象の基礎データには、より細密なデータが必要となります。そこで私たちは、岩手県において、アメダスの観測点の間を埋めるかたちで気温観測点を設置し、地形の影響も考慮した、より詳細な気温マップの作成を試みています。

例えば、県立大学のある滝沢のアメダスの観測点は、降水量のみのデータです。滝沢の気温を盛岡のデータで代わりとすることができるでしょうか？　観測から、滝沢のほうが盛岡より一～二℃低いことがわかりました。普段の生活では一℃程度は気にならないかもしれませんが、分析する事象によっては、一℃は大きな違いです。デリバティブなどでは、一℃の違いで補償金が支払われるかどうかということになりかねません。このデータを使ってヒートアイランドの調査も矢巾町で行っていますが、町の中と外の差もせいぜい二℃です。人間の活動の影響を調べるときも、一、二℃という違いは大切です。

このように、より詳しい気象の状況を調査分析することは、基礎的ですが重要な研究です。

（本学准教授　気候学・気象学）


気温測定の様子

その他の研究テーマ

他にも環境政策講座では多様な自然環境に関する研究を行っています。水生植物ヨシを利用した省エネ型浄化システムの開発、地形の形成過程の復元、流域スケールの水循環および土砂の移動、岩手県内の両生類の分布、里山の植物分布と人の管理の関係についてなどなど。HPにはこれまでの卒業論文のタイトル一覧もありますので、その多様さを感じてください。

活躍する先輩

学部 1期生
柳原 千穂さん

私は、その季節、その日ならではの動植物の営みを通訳するインタープリター（翻訳家）として、森の案内をしています。

森は一日として同じ顔を見せる日はなく、「サクラの実を食べに、あのメスグマが森にやってきたぞ」「発信器をつけたカエルが、フクロウの親子に食べられた」など、毎日が新鮮なドラマにあふれています。私たちよりもずっと長い年月をかけて育まれてきた森のしくみを実感し、生き物同士のつながり合いを目の当たりにする日々から、豊かな時間をもらっていることが何よりも幸せ。さらに、それをお客様と共有できたときは、喜びも倍増します。

それも、学生時代に様々な角度から自然と人とのかかわり合いを考え、また実体験を積む時間があったからこそ、だと思っています。

（株）ビッキオ勤務・インタープリター）

環境政策講座の就職先

環境政策講座を卒業したOB・OGのうち、専門知識を活かして、環境系コンサルタントやホテルに勤めて散策ツアーの案内を行っている人もいます。

銀行や流通、公務員などの職種も多いですが、物事の考え方やデータの扱い方などは、どこへ就職しても活用できるでしょう。

おじゃまします　倉原 宗孝 ゼミ

地域で行動し、考える現場主義のまちづくり

中心市街地活性化や伝統芸能の継承、景観保全そして食文化の探求…。様々な事柄をテーマに、まちづくりに取り組んでいる倉原教授「大事なのは地元での具体的な実践」と、盛岡市青山町で行う雪明かりイベントや藪川地区でのヒアリングなど、実践的な活動は数知れない。

そんな倉原教授と行動を共にするのが、四年生の一家直貴さん、澤藤亮輔さん、畠山和真さんと、ウィグル出身の研究生ジャッパル・カティルさんの四人。各自の卒論テーマも、伝統芸能を利用したまちづくり、宮沢賢治の心象スケッチを用いた景観評価、開拓牧場の歴史を地域活性へ結びつける試みと、これまでの経験をベースに導き出されたものばかり。「町に出てみないと、まちづくりはわからないし」と畠山さんが言うように、徹底した現場主義こそが倉原ゼミの基本スタンスだ。

チームワークのよさに加え、活動では司会や事務担当など各自の「役」も決まっているとか。ちなみに倉原教授は「王子」と、四人は「一致。「先生は子供と大人の頭を持っているから」と笑う。そんな自在な発想に刺激され、彼らは成長してきたのだろう。「人間発達を通じてこそ町も豊かになっていく」と、倉原教授も確信している。

変革期を迎えた日本の行政経営。官と民、二つの視点で方向性を探る

西出順郎准教授

◆プロフィール
福井大学教育学部卒業後、福井県職員として入庁。研修派遣制度により92年4月から1年間株式会社電通で研修し、93年からは世界体操選手権鯖江大会組織事務局にて大会運営等に携わる。在職中に米国のシラキュース大学マクスウェル公共経営大学院にて公共経営修士・学術修士（経済学）を取得。専門分野は行政経営と評価研究。

さまざまな学問分野の研究者が揃う行政・社会講座に、今年四月に新たなメンバーが加わった。沖縄県の琉球大学大学評価センターより赴任された西出順郎准教授は、福井県の県職員として二〇年近くにわたって「現場」を体験してきた行政経営の研究者。公共経営と政策評価研究をテーマに、行政活動の効果・効率の追求をアプローチのひとつに据えた研究を行っている。

日本経済に大きな打撃を与えた九〇年代のバブル崩壊。その影響は企業のみではなく、行政の抱えていた問題を浮き彫りにすることにも繋がったと西出准教授。「社保庁の年金問題や公共事業の無駄遣いなど、従来の行財政運営を疑問視する声が上がり始めたのもこの時代。また、効率や効果を数値化しにくい分野における政策の甘えや手抜きも露程してきました。それはチェックの方法について考えてこなかった、社会全体の責任でもあると思います」。これを契機に、政策評価という理論が実務の上でも語られるようになったと西出准教授は続ける。

では今後、行政はどの方向へ向かうのか。西出准教授の掲げるキーワードは「選択と集中」だ。

「もはや地域社会の担い手が行政という認識は脱却しなくてはいけない。これからはNPOや市民団体などとの協働も視野に入れ、その中で行政が何をやるべきか、仕事そのものの精査をしていく必要があるんです」。それはパラダイムシフトともいうべき、発想の大転換である。

実は西出准教授ご自身もいくつかの「転換」を経験している。まずは県職員時代に経験した大手広告代理店電通での一年間の研修と、九五年に開催された世界体操選手権鯖江大会の組織委員会事務局での経験だ。「電通ではテレビやラジオ、プロモーションなどさまざまなメディアの在り方を学び、大会事務局では民間など組織文化の異なる人々と仕事をしました。それまでのものの考え方も変わり、ネットワークとコネクションを培うこともできた」と振り返る。さらに行政学プログラムを学んだ米国のシラキュース大学で体験したグループワークの手法も、大きな成果のひとつになったという。「課題を与えてプレゼンと議論を繰り返すこの手法は、リーダーシップやチームビルディング、協調性などを学ぶ最適の方法。どんな学問でも議論することは大切なんですが、法則を見つけるのではなく、今そこにある課題を解決していく学問においては、それらがより大きな力となるアプローチ法。学生のうちにトレーニングを積んでおいた方がいい」と強調する。

県立大に赴任して半年、授業や実習を通して感じた本学部学生の印象を「一見するとおとなしく受け身」と評するが、「それはあくまで一面。全体を見ずにものを語るべきではない」と西出准教授はいう。大事なのは世間一般の評価ではなく、一人ひとりが自らの個性を輝かせること。「自分自身をカテゴライズせず、まずは自分の長所を認識すること。そして大学生活四年間に『完全燃焼』すること。部活でも旅行でも何でもいい、情熱を持って何かに取り組んでほしいと思います」。さまざまな経験でご自身を変革してきた、先生らしいメッセージだ。

NEW Intelligence

経済活動あるところに会計学あり。知の『インフラ』として学ぶ意欲を

金子友裕講師

◆プロフィール
明治大学経営学研究科を修了、経営学博士。高校教師や企業の税理士、会計講師など様々な職の経験を通し「より高い視点から会計学教育へ取り組みたい」と研究者の道へ入る。明治大学助手などを経て、2009年4月より岩手県立大学総合政策学部講師。日本会計研究学会などさまざまな学会にも所属し、論文も多数。

国や企業間の取引から今晩の夕食の買い出しまで、私たちの暮らしはさまざまな経済活動の上に成り立っている。これらの経済事象を貨幣で表したものが会計であり、その中にある法則や性格、構造などを理論的に解明していく学問が会計学だ。

「人と社会のあるところに会計ありというぐらい、会計自体は実学的なもの。その一方で新しい会計基準や理念を作る時には、やはり学問的考察が必要になる。でも『学』だけが前進して『実』を失ってしまうのではなく、理念と実学が両輪の輪になっているのが会計学の特徴。実体経済に直接関わりながら研究ができるというのは、とても面白いと思いますね」。

そう話す金子友裕講師は税理士として企業の財務会計に関わった経験があり、まさに学と実の両方の世界を知る研究者。本学部唯一の会計学の教員として、今年の四月から教壇に立つ。

このように経済と密接な関係にある会計学は、当然のごとく日々変化している。たとえば報道などで「国際財務報告基準」という言葉を聞いたことはないだろうか。これは民間機関の国際会計基準審議会（IASB）により作成作業が行われている、国際標準の会計基準。市場や企業活動のグローバル化に伴い、投資家が世界の企業の比較評価をするという必要性の中から生まれた情報開示のための物差しだが「その基準はコロコロ変わっている」と金子講師は話す。

理由の一つが、昨今の金融危機。「会計基準を決めるために必須の市場が機能不安になり、既存の会計の問題が顕在化した形。だから海外の市場では、今までの基準を再検討している最中なんです」。一方、日本はというと、それまでの独自の基準から国際会計基準へとシフトしている段階なのだとか。市場の信頼度を見極めながらの「国際化」の舵取りに、会計学研究者の果たす役割は大きくなっていきそうだ。「これまでの会計学では範疇外だった非財務情報の扱い方も今後重要なテーマになる。行動や社会事象も意識しながら、その時代に合ったシステムを探していかなくては」。実務家と研究者、二つの視点を持つ金子講師は行く末を見つめる。

県立大では授業のかたわら簿記検定や税理士試験の相談に乗り、また研究室で勉強会も行うなど学生との接点も多い金子講師。興味の高さに手応えを感じつつ「まずは簿記を知ることから」と、基礎の習得に力を注ぐ。「会計は社会のあらゆる場所で必須の知識であり、研究者はもちろん実務者、経営者などいろいろな職種に広がっていく可能性だってある。環境分野や公益社会活動においても、お金の動きや法律を知っていることは大切なこと。自身の『インフラ』として、学生の時にこそ会計を習得してほしい」。

教員として見せる学生への期待に加え、新天地岩手での研究活動の展開にも期待がにじむ。「岩手県ではまだ企業の基盤的活動を会計がサポートできていないし、情報開示意欲も薄いと感じた。今後、県内企業を見ていくためにも、総合政策学部の強みを活かして他の学問分野の先生の知識に照らしながら、自分の研究を進めていきたいですね」。金子講師ご自身も、ここ岩手で新たなインフラ整備を始めつつあるようだ。

コースを語る ～総合政策学部生の生きる道～

Aさん： 総合政策学部には、環境・地域コースと行政・経営コースの二つのコースが設けられていますよね。このコースというのは、どういうものなのでしょうか？

Bさん： 「コース」という言葉は、多くの大学で使われているけれども、大学設置基準（大学の体裁を定めた規則）などにはその定義は書いていないんだ。「学部」とか「学科」、「課程」という言葉はあるけどね。

まあ、一般的なイメージは学部の中にあって、入学時は分かれていないんだけれど、在学期間のある時期から分かれて、そこでより専門的に学ぶためのものだね。

Aさん： まあ、定義が無いというのは驚きですね。それでは、「コース」というのはどうでもいいものなんですか。

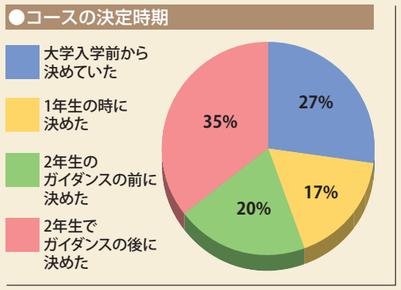
Bさん： いやいや、実は重要なものなんだよ。どちらのコースに所属するかによって、卒業するまでにやっておかなければならないこと（「卒業要件」といいます）が変わってくるんだ。特に、その条件の一つに、どのような実習をとらなければいけないか、ということも決まっているんだよ。やはり入学時点で自分がどういう勉強をして、どういう形で卒業し、社会に出て行くか、というイメージを持つことは大事なことだと思うんだよね。

解説： 「卒業要件」とは、卒業までに満たさなければいけない在学年数と単位数のこと。単位数というのは授業科目ごとに設けられている数字で、商品についている「ポイント」みたいなもの。貯めるといいことがある…というわけではない。

Aさん： そうなんですか。私、あまり先のことを考えるのは苦手なので、ちょっと困ってしまいます。

Bさん： 確かにそうだね。実際、これまでの先輩達も同じような悩みを持っていたようなんだ。アンケート調査をとってみると、入学前に決めたという人はそれほど多くなくて、むしろ説明会（ガイダンス）を聞いてから決める人が多いようだね（左図）。

●コースの決定時期



Aさん： みんな同じみたいで、なんだかホッとしたわ。

でも、まったく問題の解決にはなってませんね。それぞれのコースの内容が分かりやすくなってくれればいいんだけれど。

Bさん： それぞれのコースの内容は、カリキュラム（何年生のときにどんな科目をとるべきかを定めたもの。「教育課程」ともいいます）の変遷とともに実は微妙に変わってきているんだ。そこで、一言で表現するのがとても難しいんだ。例えば、君が「まちづくり」に興味があるのだとしよう。でも、「まちづくり」って、かなり曖昧な言葉だよね。言葉の印象としては「環境・地域」に近いのかな？「行政・経営」に近いのかな？

Aさん： 地域っていう言葉が入っているくらいだから、「環境・地域」かしら。でも、「まち」っていうのは行政の話でもあるのよね。

Bさん： 景観なんていう言葉からは環境の印象もあるし、商店街活性化なんていうと、経営的なところもあるよね。

Aさん： 混乱してきました。

Bさん： もともと総合政策という「まちづくり」みたいに曖昧なニュアンスをもった事柄を学んだり、研究したりするところだから、最初は混乱するのも仕方がないと思うよ。重要なのは「切り口」だろうね。トマトなら輪切りにしてもいいし、くし（櫛）切りにしてもいいし。それと同じだと思えばいい。

例えば、こんなふうにしてみると自分がどちらのコースに向いているか分かるかもね。

（方法1） 先生方のプロフィールを見る。コースというのは「研究室（ゼミ）」の集まりでもある。ということは、どの先生がどちらのコースにいるのかを把握しておけばよいのだ。

（方法2） 卒論のタイトルから考える。卒論データベースで気になるキーワードを検索。あるいは全部端から見ていく。面白そうなタイトルがあったら、所属研究室をチェックする。この方法の難点は、その研究室の先生が既に退職なさっている場合があることだ。

（方法3） 気に入った実習や演習から判断する。ただし、コース所属の全教員と触れ合える保障がない、研究室配属の後に実習が行われることがある、などの問題もある。

Aさん： だんだん分かってきました。つまり、自分のやりたいことをできるだけ具体的に考えて、どういう卒業研究がしたいのか、そのためにはどういうコースを選ぶべきなのかを早めに考える必要があるんですね。

Bさん： そうそう。そのためにコース配属の前にいろいろ考えることが重要なんだよ。

Aさん： コースを選ぶことをコース配属というんですね。コース配属は具体的にはどんなふうに進むのかしら。

Bさん： コース配属は二年生から三年生に進級するときに同時に決まるんだよ。

進級判定とコース配属の様子
（1）二年生の冬にガイダンスに出席して、説明を聞く。
（2）所属コースの希望届けと志望理由書を提出する。コース毎に定員枠があり、場合によっては、不本意な結果になることもある。
（3）所属コースの配属結果が壁に貼りだされる。

Aさん： もしかしたら、自分の希望するコースに配属されない場合もあるのね。怖いわ。

Bさん： できる限り希望に沿うように調整はしているんだけれど、どうしても偏りが生じる場合もあるんだ。コースの定員は概ね開講ゼミの数に比例して決まるので、諸事情で開講されるゼミが増えたり減ったりすることもあるよ。

Aさん： いったんコース配属されると、もう変えることはできないのかしら。

Bさん： 原則としてはそうだね。だから慎重に選ぶべきだけれど、指導教員の都合で卒論の指導ができなくなったときは、コースを変えたケースもあったよ。

Aさん： コースについてはだいぶ理解できました。でも、こうしたコースを設けることにはどんな意味があるのかしら。

Bさん： 学科と比べるといいかもしれない。総合政策学部は一学科制だ。つまり、総合政策学部・総合政策学科で一つなんだ。これが仮に二つの学科だとしたら、どうだろう。入学試験の時点で最初から二つに分かれてしまうよね。

Aさん： 最初から決めないといけないのは、厳しいですね。コース制なら、入学してからしばらくは進路をいろいろ考えることができるのね。

Bさん： そういうこと。ある程度の自由があるんだ。でも、それにかこつけて将来を考えないと進級判定のときに痛い目を見るけれどね。

Aさん： うへぇー。

総合政策学部への期待

学長　中村慶久

岩手県立大学に赴任して以来、本学を生かすも殺すも総合政策学部次第と思う気持ちが日に日に強くなっている。他の学部はそれなりにミッションが明確であるが、本学部は思い次第で何色にも染められる。それだけに総合政策学部の存在は、本学だけでなく、岩手県にとっても極めて大きい。

法人化したとはいえ、本学は県民に支えられている。総合政策学部の教員が、県民のオピニオンリーダとして、様々な立場で活躍されているのは嬉しい。岩手県は、私が育った五十年前より豊かになり、地域おこしに成功した話も聞く。しかし依然として貧しい。それは引っ込み思案で人の良い県民性に依るところもあるが、端から自信を失っているところもある。その気質は本学の学生にもあるように思うし、教員にも浸透してはいないだろうか。

典型的な工学系人間である私から見ると、総合政策学部は広い視野と見識を持った教員集団である。本学を良くする知恵、未来の岩手を豊かにする前向きな提言と実践力を、私は本学部に大いに期待している。

自転車の交通ルールを考えるフォーラム

去る五月一七日に盛岡市内のカワトク七階ロイヤルルームで当学部および盛岡自転車会議、㈳土木学会自転車空間研究小委員会の主催で標記シンポジウムを行いました。

近年の自転車事故の増加、自転車の交通マナーの悪さ、自転車レーンなど自転車の走行空間づくりの動きなどを受け、自転車交通に関する情報提供や交通マナーに関する意識啓発を目的として企画しました。

シンポジウムでは主催の研究小委員会代表の徳島大学の山中教授をはじめ、交通安全研究の秋田大学の浜岡准教授、自転車交通政策を担当する盛岡市交通政策課、海外の自転車交通事情に詳しい当学部の元田教授から話題提供をいただき、続くパネルディスカッションではBike to Work 秋田コーディネーターの佐々木泰作さんや元田ゼミ四年の千葉丈嗣君、盛岡自転車会議の斎藤純代表が加わり、私が進行役となって自転車の交通ルールやマナーに関して議論を行いました。特に自転車の走行位置（自転車は左側通行、車道通行が原則）について、活発な議論が行われました。

（宇佐美誠史　本学部助手・交通工学）

元田教授の話題提供

野球部二部で活躍

硬式野球部は昨年秋季リーグで二年ぶりに北東北リーグの二部に昇格しました。春季リーグでは、最初のカードで強豪の盛岡大学を敗るなど台風の目となり、いきなり優勝争いに加わりました。最終戦で敗れて二位タイとなりましたが、これは開学以来最高の成績でした。しかし新人戦では、リーグ戦で連勝した青森中央学院大学に完敗するなど、まだ発展途上のチームです。秋季リーグでは一時は悪夢の四連敗も、終わってみれば五勝五敗で再び二位タイでした。中心となっていた四年生が抜けたこれから、来春へ向けてチーム作りが始まります。より一層の練習をして、つねに上位を狙える位置を占めてほしいものです。

野球部の雰囲気は明るく、のびのびとプレーしています。控えの選手もベンチから大きな声を出し、不振の選手には一球ごと、一つのプレーごとにアドバイスが送られます。

監督を務めるのは総合政策学部一期生の中村淳一さん。部員も現在二三人のうち総合政策学部生は九人と中心になっています。ぜひ球場に応援に来て下さいね。

（貝市建　本学部講師・野球部部長）

さんさ踊りでも大活躍

研究最前線

人間らしい働き方 働かせ方を模索する

岡田 寛史

私の専門である経営学は学際的性格の強い学問です。それは、企業経営そのものが多くの側面をもつ複雑な活動だからです。

第1に、企業は法人として存在し、その活動も法律で規定され制約されます。これが法的側面。第2に、企業は機械設備や原材料などの物的・技術的諸手段を用いますし、それらを人間と合理的に結びつける技術も必要とします。技術的側面ですね。第3に、企業は多数の人々による組織的活動ですので、技術的合理性の追求のみならず、動機や欲求、感情といった人間的要素にも慎重に対応する必要があります。これが人間的側面。最後に、企業は生産性・経済性・収益性などを指標に活動する経済的経営体ですので、経済的側面が最も基本的な側面となります。これらの側面から、法学、工学や技術論、心理学や社会学、経済学などの学問の研究方法や成果を、経営学は積極的に活用しているのです。多面的で学際的という点で、経営学は総合政策学部ととても相性の良い学問であると感じています。

私はこの経営学において、人の働き方・働かせ方に関わる領域を研究対象としています。一般に人事労務管理論とか人的資源管理論と呼ばれる領域です。この領域もさきの4側面と密接に関わっています。労働の基本的側面も経済的側面ですが、技術的側面である科学技術の進歩は労働内容を、人間的側面である行動科学の発達は管理方法を変化させます。法的側面である労働法の変化は労働者保護に大きな影響をもたらします。

現代はこのいずれの側面においても進歩・発展しているはずなのですが、長時間労働、過労死、ワーキング・プアといった問題が企業経営との関連で生じています。それは何故なのか。どうすれば人間らしい働き方・働かせ方を実現することができるのか。私の研究はそれを理論的に考察することです。文献研究や議論を通じて、思考し続けることが私の研究スタイルです。

（本学部教授　経営学・経営管理論）

風のモント達

ロシアへの学生派遣事業に参加。人が知らない分野へ取り組みたい

3年　八島璃可子さん

きっかけは中学3年の時、学生派遣事業でハバロフスクを訪れたこと。「それ以来いつも頭の片隅にロシアという国があった」と話す八島璃可子さん。今年5月には日本青年会議所ロシア友好の会が主催する、ロシアミッション学生派遣事業で8日間のロシア訪問を体験した。派遣事業への参加は、岩手県からは八島さんが初めてである。

事業の目的は現地の大学生との交流。モスクワとサンクトペテルブルグの2都市に滞在し、モスクワ大学とサンクトペテルブルグ大学を訪れた。「日本のサブカルチャーはロシアでも人気。特にアニメの紹介はすごく喜ばれました」と八島さんは笑う。しかし、北方領土問題についてのディスカッションでは「政治的な話はできない」と口を閉ざす学生も。「彼らの親はソ連時代を知る世代。日本との歴史を直接聞いて育ったからか、自国への愛着心がとても強い。教科書でしか学んでこなかった私たちとは、歴史感に決定的な違いがあると知りました」。認識の違いにショックは受けたが、「それは両国間の交流が絶対的に足りないため」というのが八島さんの考えだ。

「日露間の交流人口は、日中間の10分の1程度。そもそもロシアがどんな国か知らない日本人がとても多いんです。ロシアを訪れる機会が増えれば、意識もきっと変わっていくはず」。

人気のアメリカやオーストラリアではなく、女性なら一度は憧れるヨーロッパも八島さんの興味の対象にはならなかった。「だって、誰もが知っている国々もいて面白くない。私、他の人が知らないことをやりたいんです」。きらりと光るまなざしに、好奇心と強い意思が見て取れる。

本学部では財政学が専門の桒田但馬（くわだ）講師のゼミに所属し、まちづくりや地域活性について勉強中。「ゼミ生の中には文化や環境面からアプローチする人もいて勉強になる。卒業後は公務員として地域に関わる仕事ができたら最高ですね」。これまで重ねたさまざまな経験はきっと、その夢を掴むための確かな地盤になるだろう。

学生ボランティア活動に全力投球。活動を通して人間的にも成長できた

3年　松尾　東さん

高校時代は陸上選手として活躍した松尾東さんが、大学に入ったら取り組もうと決めていたのがボランティア活動。「誰かの役に立つことで自分も得るものがある。人間として大きく成長したいと思ったんです」。1年次から学生有志のボランティアグループ「ASSIST（アシスト）」に参加し、今年の春からは会の代表として50人の仲間とともに活動を続けている。

代表として会の活動目的も明確にした。その一つが、環境犯罪学の一分野であるブロークン・ウィンドウ論の勉強会。「たとえば、窓が1枚割れている建物は、他の窓も割られやすくなる。環境美化活動を行うことで少年非行防止にもなることを理解してもらうのが狙い」と松尾さん。

参加者からは「活動に参加したい」との声も上がり、会が継続して行ってきたごみ拾いや落書き消しなどへの理解も深めることになったという。また、7月には盛岡市の演劇同好会などと協力して「振り込め詐欺防ぎ隊」を結成、警察や行政と連携した犯罪撲滅のための啓発活動もスタートさせた。

小学生との交流もASSISTの活動の柱だ。児童センターでの交流に加え、今年度からは滝沢東小学校でのスクールガード活動も本格スタート。メンバーが交代で登校時の挨拶運動と下校の付き添いを行っている。「子供たちは大喜びだし、親や地域の人たちと関わることで僕ら学生が社会を知るきっかけにもなる。なにより地域社会はもちろん他の学生にも、学生のボランティア活動の重要性を知ってほしい」と松尾さん。自らの実践を通し、活動の輪が広がることを願っている。

そんな松尾さんらしく、石堂淳教授のゼミで学んでいるのは刑法学。「法律を知るにつけ物事のバランスを考えるようになり、思考もすごく柔軟になった」と成果を語る表情は楽しげだ。将来の夢は警察官で「地域や人と顔を合わせる交番勤務をしてみたい」とも。それは情熱を持って取り組んできたボランティア活動の先に、しっかりと引かれた1本のレールである。

数理の世界

クレジットカードのリボルビング払い②

Tee KianHeng

2009年7月31日付の日本経済新聞に不況でクレジットカードのリボ払いの利用が増加したが、手数料など苦情も急増しているという記事があった。ぜひその仕組みを知ってほしいので、今回も返済方法について紹介する。

前回は定額方式で元利定率について紹介したが、今回は同じ方式で元金定率について紹介する。これはショッピングの総額（それまでの未返済の金額も含む）から、あらかじめ設定した金額（元金）に加え、未返済の金額に対する利息を毎月返済する方式である。

前回と比較するために、前回同様30万円の買い物をして毎月1万円の定額で返済する例を用いる。前回の例では定額返済の1万円に元金返済と利息分が含まれているのに対して、今回は1万円＋未返済の元金に対する利息を毎月返済することになる。なお、返済途中で買い物がないことを仮定する。

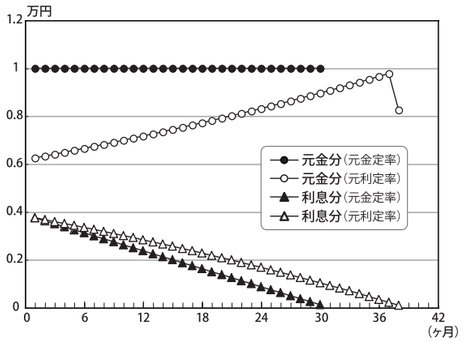
返済利率を年率15％として、1ヶ月目の利息＝30万円×15％×1/12＝3,750円、元金の1万円を加えると1ヶ月目の返済は13,750円となり、次月に繰越す元金＝30万円－1万円＝29万円となる。そして、2ヶ月目の利息は繰越された元金の29万円に15％×1/12を掛けるので3,625円となる。ここからわかるように元金定率というのは元金が一定の割合で減少していくので、この場合は30ヶ月目に返済が終了することとなる。その時の返済額は元金の1万円に利息125円（1万×15％×1/12）を加えた金額となる。

前回と比較してみると、30万円を完済するのに、元利定率では38ヶ月要したのに対して、元金定率では30ヶ月であった。総利息は元利定率では7万8,357円に対して、元金定率では5万8,125円であった。また2万円の定額で30万円を完済するのに元利定率では17ヶ月要したのに対して、元金定率では15ヶ月であった。総利息は元利定率では3万4,320円に対して元金定率では3万円であった。

グラフは元利定率と元金定率の違いを示している。上述からもわかるように、元金定率の方が早く完済できることがわかる。特に毎月の返済額が小さい場合は、元金定率の方が早く完済できる。

（本学部准教授　計量経済学）

●30万円の定額（元利定率・元金定率）の利息及び元金返済



オープンキャンパス

さる七月五日に本学滝沢キャンパスでオープンキャンパスが行われました。学部説明会では、多様な視点に基づき、自ら考える力を養成する総合政策学部の魅力についてじっくりと説明が行われ、高校生の皆さんをはじめ、ご家族や高校の先生方からも活発に質問が出ていました。

また、模擬講義として、倉原宗孝教授による「私たちの『まちづくり』を考える」、見市建講師による「国際関係を理論的に考える」が行われ、本学部ならではの題材に、会場を訪れた高校生の皆さんも真剣な眼差しで聴講していました。

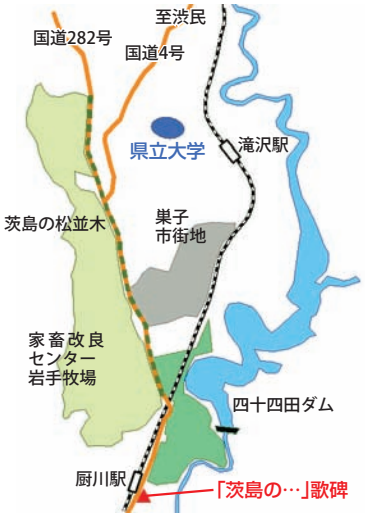
さらに各教員の研究室を訪ね、専門分野について知ることのできる研究室ツアーや、パネルなどを用いた卒業研究・実習の紹介なども行われました。特に学生によるゼミ紹介、サークル活動の展示、よろず相談は、直接在学生から学生生活について聞ける機会として大変好評でした。

今後は、さらに身近に感じられる充実したオープンキャンパスにしていきたいと思います。（入試委員会）

キャンパス周辺散策③

啄木作品に見る大学界隈

島田直明



岩手県を代表する歌人・作家の一人である石川啄木（1886-1912）の故郷は、県立大学から北に数kmしか離れていない渋民村（現盛岡市玉山区渋民地区）です。県立大学のほど近くで幼少期を過ごしました。

短歌の中に故郷を詠ったものが散見されますが、その中に県立大学周辺を題材に取り上げているものもあります。

茨島（ばらしま）の松の並木の街道を
われと行（ゆ）きし少女（をとめ）
オをたのみき

厨川にある「茨島の･･･」歌碑

茨島というのは盛岡から渋民への中間地点で、家畜改良センター岩手牧場から県立大学周辺のことを指し、現在の国道4号沿いの並木のことを詠んでいます。啄木は中学から盛岡で下宿していましたが、自宅のある渋民に帰る際に通るなじみ深い所だったのでしょう。

岩手山（いわてやま）
秋はふもとの三方（さんぽう）の
野に満つる虫を何（なに）と聴くらむ

この短歌を詠んだ頃はすでに東京にいた啄木は盛岡出身の友人、金田一京助（言語学者として有名）との会話中、故郷の話題で盛り上がったようです。日記に「金田一君と話したりして二時頃寝た。（中略）茨島の秋草の話虫の話で泣きたいくらい動悸がした」と記し、その翌日にこの短歌が作られました。作品中には茨島の地名は出てきませんが、前日の会話から、この作品ができたと考えることは難しくないでしょう。

大学周辺は岩手山を正面に、周囲を野原に囲まれ、啄木が「泣きたいくらい」と形容した景観なのです。岩手山を眺め、虫の声を聞きながら、大学周辺を歩いてみませんか？

（本学部助手・景観生態学）

●編集後記

▼初めて選挙によって政権も交代しました。当大学も学長が交代し、学部も新しい教員が来ました。気持ちも新たに進みたいと思います。（Y.M.）▼今回、やや長めの記事を勢いに任せて書きました。何事においても勢いは重要だと思います。これからもその場の勢いで生きていこうと思います。（まるまる虫）▼十月一日、広島地裁で埋立免許差止判決が出ました（鞆の浦訴訟）。自然環境保護を法的利益と見なす初めての司法判断で、大変注目されます。（C.T.-S）▼特集では、環境科学分野の教育・研究活動に焦点を当てました。本学部の多様な姿を知っていただく一助となれば幸いです。（の）▼あらためて環境政策講座における教育の充実ぶりを認識しました。政権交代で「環境」が重要なキーワードになりました。学生たちの活躍を期待します。（T）▼岩手に来てから自然環境を身近に感じるようになった。どんなものでも守っていかなければ、とつくづく思う。「食欲の秋」だけど。（TKO）▼芸術家や哲学者は良い景観のところで輩出されると言います。石川啄木はその好例といえそうです。次号では賢治作品を紹介します（なっ）

●編集スタッフ＝元田良孝（編集責任者）、高嶋裕一、斎藤千加子、小井田伸雄、山本　健、桒田但馬、島田直明

●ご意見をお待ちしています
MONTOへのご意見・ご感想・ご要望は、氏名、住所、電話番号を明記のうえ、「総合政策学部広報・交流委員会」宛てで、下記連絡先まで。電子メール送付（monto@iwate-pu.ac.jp）でも構いません。よろしくお願いいたします。

MONTO

●【MONTO】岩手県立大学総合政策学部ニュース　Iwate Prefectural University
●第22号：2009年（平成21年）10月24日●発行：公立大学法人岩手県立大学総合政策学部
〒020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字巣子152-52
代表TEL019-694-2000　学部019-694-2700　FAX019-694-2701（学部事務室）
印刷／株式会社杜陵印刷　TEL019-641-8000

《MONTO WEB版》URL
http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/monto/index_monto.html
＊岩手県立大学のホームページ　http://www.iwate-pu.ac.jp/ から総合政策学部をクリックして、次に「学部機関紙MONTO」をクリックしてもアクセスできます。